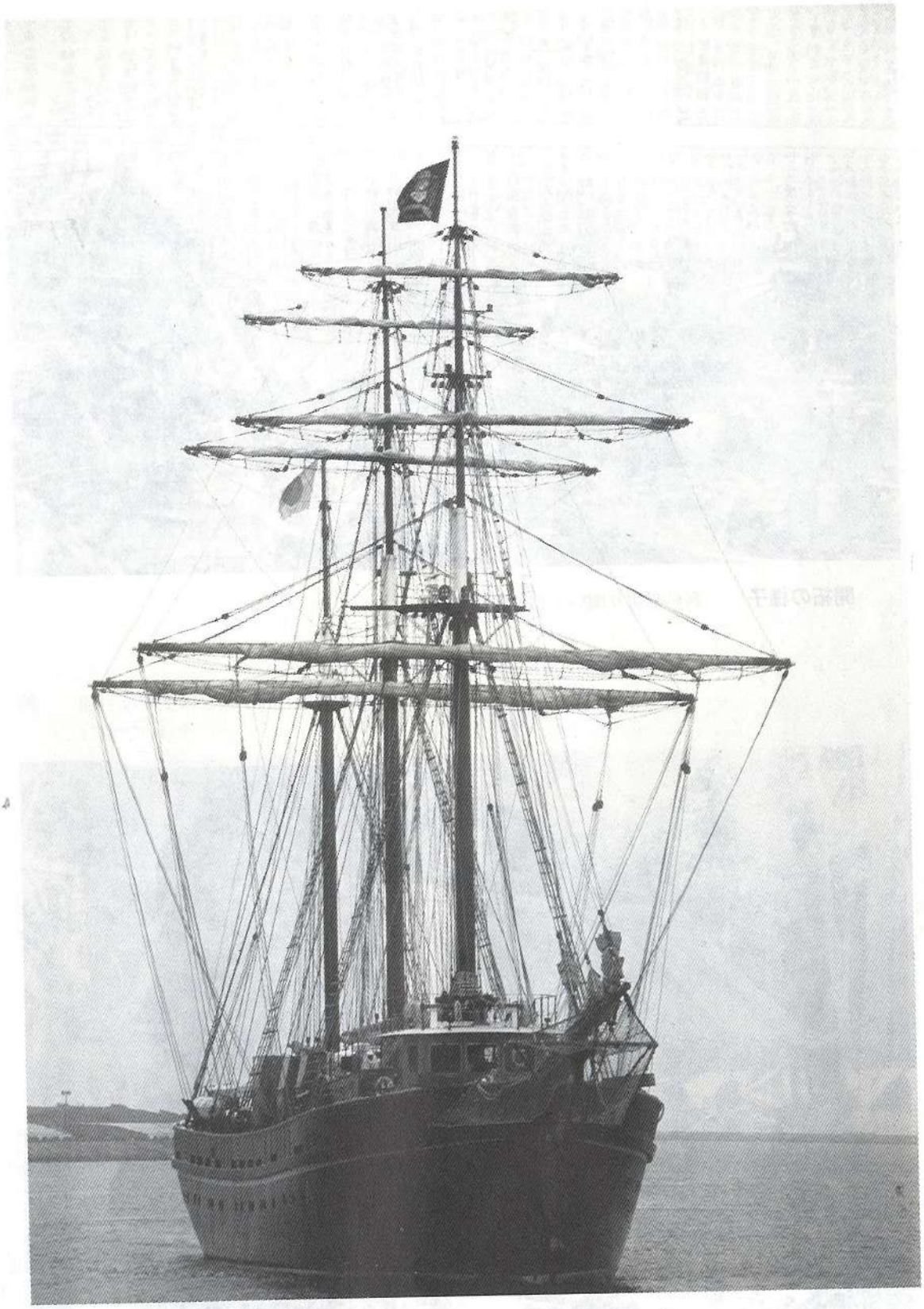
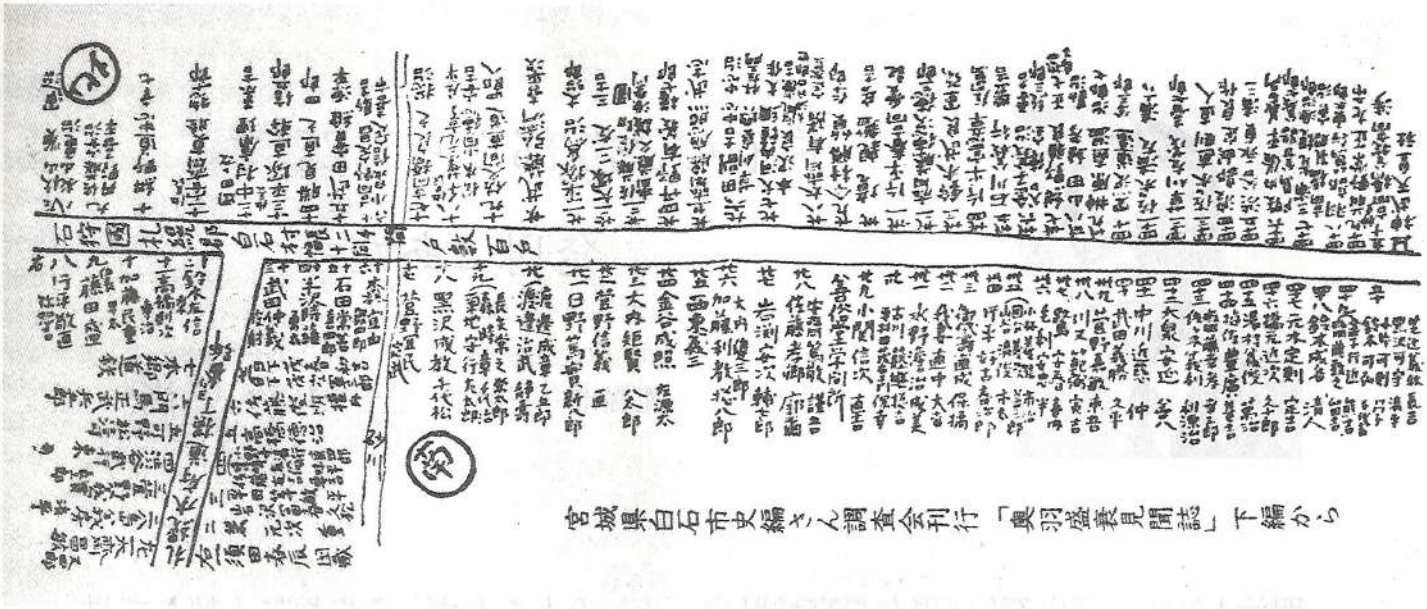


平成 8 年石狩湾に寄港した咸臨丸（復元）

白石の開拓の祖・仙台藩白石領（現在の宮城県白石市）の人たちが、明治 4 年北海道移住のために使用した

開拓の様子　　雑木を切り倒して畑を広げていった

開拓者の小屋掛けの様子　　ノミ、マサカリ、山刀など以小屋の道具を使い、雑木の柱を立て、屋根や壁はカヤで葺いて作られた



宮城県白石市史編さん調査会刊行「奥羽盛衰見聞誌」下編から

白石村の土地割り図　現在の国道12号沿に、中央1条1丁目の陸橋から白石神社までの間を割り振られた

開村碑　開村40年を記念して白石神社境内に建てられた

白石村役場（大正時代）
現在の白石連絡所の場所（本通1丁目南）に建てられていた

米里南地区の開拓に貢献
戦前から戦後の農業

語り部　野上富太郎氏（75歳）
生年月日　大正11年10月16日
住　所　札幌市白石区
菊水元町8条2丁目
略　歴
白石村米里で出生。農業の傍ら農業委員、民生児童委員、町内会長などを歴任

水田や畑を耕すのは大変な仕事です。米里は粘土質のため土がこなれにくく、馬で耕した後にさらに人手でくわやすきを使わなければなりませんでした。洪水にもよくやられましたよ。

◆洪水常襲地の米里へ

私は札幌在住の3代目です。祖父の勇司は、明治23年（1890）3月に青森県津軽郡上戸川村から北海道に移住し、札幌の南2条西1丁目の官舎に住んだと聞いています。祖父は嘉永6年（1853）生まれですが、漢字などの素養があり、青森では寺子屋の先生をしていたそうです。札幌では創成川駅通の会計係の任に就きましたが、泥棒に入られ、補償や責任問題から官舎を出て、現在の経王寺付近（現豊平4条3丁目）である豊平13番地に移りました。明治35年（1902）2月のことでした。父の二郎は、明治29年（1896）2月に生まれています。

その後、上白石村字米里762の原野を買い農業を始めましたが、当時この辺りは、熊や鹿の出る所で、アカダモ、ヤナギ、ヤチダモなどの雑木林だったようです。豊平川右岸から現在の米里通までは、砂れきの土砂堆積地帯ですが、そこから東の地帯は泥流粘土地、逆川から北はいわゆる「石狩低地帯」になります。

私は、大正11年（1922）に白石村米里165番地で生まれました。男4人女4人の長男です。学校は、父と同じく上白石小学校に通いました。夏も冬も米里通から藻岩山や手稲連峰を眺めて通いましたよ。冬は人や馬車の通った部分が凸面になっていて、その上を1番地の石井さんたちと通いました。昭和7年（1932）発行の「白石村村勢一班」によれば、尋常科が8学級、教員8名、児童数男243名、女210名、計453名でした。

米里は洪水常襲地帯と言われた所で、洪水によくやられました。道路はそのままですと馬の足が埋まってしまうので、「丸太道路」といってハンの木やヤナギの木を敷いていました。また、冬に豊平川から積み上げておいた砂利を、夏に馬車で運んで道路に敷きましたし、毎年、修繕を繰り返したものでした。米里にある長沼病院前辺りには、砂利を上げた所から川の水を引き、水田を作った跡がありますよ。

◆出面さんを雇った農繁期

うちの土地は、豊平川右岸とか米里の数カ所に分かれてまして、10町歩のうち水田が2町歩でした。稲、大豆、小豆、エン麦、麦、ナタネ、ナガイモ、ゴボウ、タマネギなどを作っていましたよ。ナガイモ、ゴボウのような根菜類は、水はけの良い豊平川右岸の砂れき層の所に植えました。タマネギは雑草が禁物ですから、草取りが大変で、ナタネは文字どおり油を絞って、カスは肥料にまわしましたよ。当時の主な肥料は、過リン酸石灰や硫安カリ、魚粕、ほかに人糞肥などでした。

家畜は馬が6頭のほか、やぎ、綿羊などを10頭飼っていました。綿羊は、毛を刈って豊平の青山製毛工場へ持って行くと、製品と交換もできました。

農繁期には人手が足りませんので、弟や妹が手伝うほか、いわゆる出面を頼みました。1日の料金は、昭和20年代は200～300円、30年代は600円、40年代は1,000円、50年代は2,800円、53年には3,800円、55年では5,000円と変化し

たものです。

生活用水は井戸水でした。囲いを作って３ｍくらい掘り、さらに13ｍほどの鉄管を打ち込むのですが、鉄分の水が出て生水は飲めず、洗濯物は茶色になるほどでした。

明かりは、電気はまだなくてランプでした。昭和17年（1942）３月、部落会長をしていた父は、村役場の横の空き地に村有林から切り出した丸太が置いてあったんですが、それを譲り受け、電柱用のものを馬ソリで運びました。人手と資材不足で、自分たちで用意しないと配線をしてもらえなかったのです。通電してもらった後、父は部落の電気代の集金もしていました。

また、この丸太材を使って三角形の火の見やぐらを作り、サイレンを設置しました。場所は今の菊水元町７条２丁目でした。後に９条２丁目の角に移しました。地域の消防団はありましたが、サイレンが鳴っても野良仕事をしている所から駆けつけるのですから、間に合うはずもなく家は全焼でした。

そのほか、北郷や米里には戦前のころから本州の開拓者が入植していましたし、戦中の昭和18年（1943）には緊急開拓者26戸が米里に入りました。戦後の昭和24年（1949）にも130戸の入植開拓団がありました。

◆馬耕から耕運機へ

昭和18年（1943）３月、旭川連隊に入って歩兵として中国へ行き、北支那で終戦を迎えました。その年の12月、兵長で佐世保に戻って来たときは23歳でした。検疫を受け、汽車で佐世保から北海道へ帰る時、札幌から急行になるのを聞き漏らして、白石で降りられず江別まで行ってしまいました。夜の11時から線路を歩いて戻り、自宅に着いたのは朝の６時少し前でした。突然の帰宅ですから、両親は驚きながらも喜びました。昭和22年（1947）に上野幌出身のミヨと結婚しました。

私は農事組合長をしていましたので、作付け状況、肥料状況、成熟度の様子などを見聞して、白石農業組合に報告していました。農家にとって水田や畑を耕すのは大変な仕事です。朝４時に起床し、夜は８時までプラオという機具を馬に引かせて耕すのです。木の根っこにプラオが引っかかると、プラオの柄の部分が跳ね上がって胸や腹に当たり痛いんです。しかも粘土質のため土がこなれにくく、馬耕の後は人手でくわやすきを使わなければ、植え付けができませんでした。

馬で水田を耕している様子

能率を上げるため、昭和26年（1951）に当時の価格で25万円の耕運機を買いました。この地域で買ったのは私が４番目でした。耕運機は一度に土が細かくなるので、人手をかけなくてもいいし、能率が上がりました。これを見ていた近所の人が、次々に「おれの畑も耕してくれ」と頼むのです。労働時間は増えましたが、おかげで２年間で機械代を払うことができました。

◆土地区画整理事業を実施

農業経営も大農法へ向けて変化し始めていましたが、札幌市への合併後は農地の中に住宅も建ち始め、農地を手放す人が出始めました。農事組合の会議でもこのことが話題となりましたが、なかなか妙案は見つかりませんでした。

そうこうしているうちに、時代の流れでしょうか、昭和41年（1966）２月「米里南土地区画整理組合」が認可され、私も理事として参加することになりました。昭和49年（1974）６月には区画整理完成記念式典が行われました。余談ですが、区画整理前の分譲価格は１坪３千円くらいでしたが、区画整理後は100坪単位で１坪８千円から１万円くらいになりました。

私は昭和41年に水田の耕作をやめ、150頭ほどの養豚を始めました。しかし、冬場の人手不足とにおいがひどいため、人家の建ち始めた所では続けることができなくなりました。

戸数が増加すると公共施設が必要なります。消防署の用地として私の地148坪を市に買ってもらい、そのは100坪を寄付しました。元町交番も私住んでいた土地の一角を買い上げてらったものです。元町児童会館も私地所でした。昭和46年（1971）市に地を寄付したことなどから、当時の理大臣佐藤栄作氏から「紺綬褒章」をけたこともありました。

私は、土地を全部処分したわけでなく、ここの住宅地とは別の所にもがありますので、春にはまだ畑を耕ています。

この辺りも土地改良工事に伴い、路やかんがい工事も行われ、河口の門や揚水ポンプなども設置されて、応洪水の心配はなくなりました。し、砂れき層、泥炭層であるため、盤は軟弱です。昭和54年（1979）、こ家を建てた時に12ｍのコンクリートを打ち込んでいますので、土台は沈しないんですが、地面が約50㎝もがってしまいました。

私は農業のほか、祖父母や両親の活を見習いながら、地域の交通安全社会福祉のために奉仕活動もしてきした。これからもできるだけこういた活動に携わっていきたいと思って ます。

―平成９年４月20日　中濱・百井聴

メロンからヒメユリまで 安定した作物を求めて

語り部　伊藤義顕（いとうよしあき）氏（81歳）
生年月日　大正5年9月27日
住　所　札幌市白石区
菊水元町3条2丁目
略　歴
現住所地で出生。農業の傍ら農協理事、農業委員、連合町内会長などを歴任。現福祉施設経営

> 気候に左右されず、小さく作つて、大きく収益の上がる作物はないかと常々考えていたんです。その時、講習会で「これからの農家は温室・花・野菜の時代だよ」と言われたんです。

◆菊亭侯爵さんの農場を宅地に

菊水上町辺りが、まだ上白石村と呼ばれていた昭和の初期に、札幌で2番目の土地区画整理事業が行われました。菊亭侯爵の農場だった場所です。当時の畑の価格は1坪1円くらいでしたが、区画整理をして1坪3～4円くらいで、150坪から300坪の区画で切り売りされました。購入したのは北炭の従業員で、退職後に札幌に来て家を建てようという人たちでした。すぐ家を建てたのは数人で、他の人はそのままにして近所の人に貸していました。宅地にすると今でいう固定資産税、当時の地租税がかかりますが、農地の場合はほとんど税金がかからなかったからです。

しかし、終戦と同時に不在地主として全部耕作者の土地になり、土地を貸していた人は一人もこの地に来ることはできませんでした。

区画整理組合では交通の便を図るため豊平川に上白石橋も架けました。昭和7年ころ、村会議員をしていた父の三左エ門を通して橋を村に寄付したいと採納願いを出しましたが、村議会では「橋なんて新しいうちはいいが、後は維持管理が大変」といったん否決され、当時のお金で5万円を添えて、やっと村の橋に認定してもらいました。

◆電気がついて兵隊へ

電気といえば思い出すことがあります。昭和15年（1940）、紀元2600年ということで日本中で大きな催しがありました。全国青年大会もその一つで、当時白石の青年団長であった私も含めて北海道から3人が出席しました。「青年の夕べ」としてラジオ放送されましたが、そのころはまだ電気がきていなかったので、聞き取れるかどうかという鉱石ラジオの前で、両親と妻の3人が耳をそばだてていたそうです。

電気がついたのは昭和18年（1943）秋のころです。ちょうど「電気がついた」と喜んでいるときに兵隊に召集されたから記憶にあります。それくらい遅くまで電気はつかなかったのです。もちろん、電話は終戦後かなり遅くて、この地区は陸の孤島だったんですよ。

◆苗植えでタマネギも有名に

私の先々代は明治25年（1892）に入植しました。当時はリンゴが平岸から豊平川の岸まで植えられていたそうですが、「水田がいい」というので皆が作り始めたそうです。水田は川をせき止めて水を浮かせて田んぼに入れます。そのため、水田のそばを1尺も掘ると水が湧いてくるほどで、リンゴの木は腐乱病になってほとんどだめになってしまったそうです。

水田の次に「何をしようか」ということになりました。豊平川扇状地は、何千年もの間に素晴らしい沖積土ができていたので何でも育ちました。川向かいの苗穂から丘珠にかけては、先々代と同じころ長野県から入植した人たちが、タマネギで一財産つくったとのことで、菊水上町から米里にかけてもタマネギを植えたようです。

本当に良いタマネギが採れるには、種まきの場合10年かかります。タマネギは連作するほどいいんです。戦後、

苗植えをするようになって、初めての土地も20年前から作っている土地も同じにできるようになり、札幌のタマネギも有名になりました。結局、苗植えが一大改革でした。

◆生産協同組合で農家が団結

戦前戦後、タマネギ、ゴボウ、ナガイモなどは仲買人が畑を青田買いしていて、「あの家は誰々さんの専売だ」と言われていました。秋になるとその仲買人がタマネギ箱を持って来て、その時の値段で売る人、あるいは業者の倉庫に入れておきいい値になった時に売る人などさまざまの状況でした。

「それではだめだ」ということで、北札幌を中心として農業協同組合法による札幌タマネギ生産協同組合をつくりました。各自が組合に出荷し、組合では売れた総額をプールして1箱いくらと値段を出して、その値段で各農家に支払われる形になりました。

白石には野菜市場もありました。私は、昭和25年（1950）に農協の理事になり、翌年から市場に常勤になりました。市場の名称は「白石農業組合上白石野菜市場」だったと思います。この市場は、大正末期ころから自分で作物を持って行って相対売りをしていた、いわば円山の朝市のような形でやっていたのを農協が譲り受け、昭和23年ころから正式に市場として始めたものです。場所は、今の国道12号のガソリンスタンドの一角（菊水9条2丁目付近）でした。昭和34年（1959）に中央卸売市場ができた時に、一緒にやらないかとの話がありましたが、「ひとしょいで持ってきてもいいよ」と言ってくれるような、少ない量でも引き受けてくれる市場にすべきだという考えから、加盟しませんでした。市場は昭和40年前後まで続きました。

◆安定した作物を求めて

話は前後しますが、昭和の初めころ私の家は半分以上は水田でした。水田には豊作凶作があるので、常々何か安定した物をと考えていました。当時、石狩支庁で冬期農業講習会があり、その講師が「これからは温室・花・野菜の時代だよ」と言われたのです。そこで、「これだ」と思い、教わったメロンを作ってみることにしました。

当時はまだ、共同出荷は考えられない時代でしたから、個々で作って販路を求めました。丸井の青果部、石田屋さん、藤井さんに完熟したものを持って行き、その日のうちに売ってもらいました。朝、露のあるうちに採ってきれいにレッテルを張って丸井さんに置いて帰ってくる、その間に家内が次の荷物を作っておく、また次の荷物をと、午前中はほとんど出荷していました。

経費は安く、田んぼの出面さんは日当1円くらいでしたが、畑は70銭くらいで、朝の7時から晩の6時まで昼1時間休むくらいで働いてもらいました。メロンは1個1円50銭から2円で出荷し、2円から3円で売ってもらいました。今のお金で2万円くらいの値段ですから病気見舞いにでも買っていただくしかないのですが、毎日出荷するほど売れたんです。メロンは昭和8年ころから10年間くらい作りました。

戦後になると、メロンほど手のかからないトマトやナスビを作りました。あのころは、お菓子や砂糖など甘い物がない時代ですから、トマトを作ると小売屋さんが玄関先まで取りに来て、「明日も」と予約して帰るんです。思ったほど採れないと小売屋さんに怒られてけんかするほどでした。トマトはメロンの3分の1くらいの手間もかかりませんので十分採算がとれました。

私が農協に勤めるころにはヒメユリを作っていました。当時、ヒメユリを大々的に作っていたのは札幌ではそうありませんでしたが、これが当たりました。奥村さんと明道さんと綱木さんが大きな花屋さんでしたので、切り花にして持って行きました。名札を付けなくても「これは伊藤のユリだな」と分かるほど良い物で評判でした。

また、切り花と併せて球根も売ることになり、検定を終え、病気は絶対ないという球根を本州の温室屋さんに送り、球根と切り花を作ってもらいました。球根と切り花で昭和26年ころのお金で100万円くらいの特別収入を上げていました。米を百俵出して30万円くらいの時です。

昭和33年ころ、米沢さんと一緒に、上湧別、滝野、道南の大野、七飯、空知の栗山など全道に呼びかけてチューリップの輸出も試みました。アメリカから植物貿易法で合格した柿の種みたいな球根をもらって始めたのです。しかし、掘って集めて乾燥させたところ、皮が全部はじけてしまい製品になりませんでした。まさか、皮が全部はじけるとは考えても見ませんでした。

◆時代の流れの中で

昭和37年（1962）にヒメユリをやめて、翌年、ヒメユリの畑に倉庫を建てて貸家業に転向し、農業とお別れすることになりました。

私は、昭和37年3月に農協を辞めてから「区画整理で街づくりをやろう」と皆に呼びかけたんですよ。わずか十数人ですが、花や野菜を作っていて裕福な農家だったから、あわてて区画整理をする必要はないと否決されました。

農協の株は、農家をやめても皆さん持っているので、今でも700から800人の組合員がいますが、専業農家は数十軒しかなく、これも時代のすう勢だなと思います。

菊水は、札幌市に入りすっかり都市化し、農業も牧畜もできなくなりました。再開発をしなければならない時期になったと思います。

ー平成8年1月13日　中西・松本聴取

昭和初期の伊藤氏のメロン畑